AA 研共同研究プロジェクト
『マルセル・モース研究－社会・交換・組合』平成 19 年度第 1 回研究会

日時　2007 年 4 月 6 日（金）午後 1 時 30 分より午後 7 時まで
場所　立命館大学創思館 4 階 405 号室
内容
1. 渡辺公三（立命館大学）
　　「モース講義録および書評文の全体像」
2. 関　一敏（九州大学）
　　「第一期、宗教関連論考の学史的背景」
3. 高島　淳（AA 研所員）
　　「モースのサンスクリット研究における特質」
4. 真島一郎（AA 研所員）
　　「二つの暴力論：モースとソレル」
5. 小杉麻李亜（立命館大学大学院生）
　　「モース《祈り》論の学史的背景」

１．「モース講義録および書評文の全体像」

渡辺による本報告は、前回研究会における渡辺報告・真島報告の双方を承けた概括に相当する。

本報告の全般を通じ渡辺が紹介・参照したのは、社会学年報学派の宗教学思想の全体像把握を企図する山崎亮氏の研究論文「社会学年報学派の宗教学思想・序説－『社会学年報』宗教社会学セクションの構成を中心に」（『島根大学教育学部紀要』所収）である。

モースの書評文および講義抄録文の通時的な俯瞰作業に際し、重要な論点として問われてくるのは、従来「社会学年報学派」と呼ばれてきた、デュルケムをとりまくこれら一連の研究者群像が、現実にはどのような集団性・凝集性のもとで活動していたかという点である。『社会学年報』の書評（正しくはアナリーズと呼ばれる文献解題）欄掲載用にモースが選びとった（あるいは分担した）書評対象文献は、いうまでもなく上記の集団性の内実と深く連動しているためである。

さらにこの問題は、断続する『社会学年報』編集作業のはざまをぬってモースが行った講義内容にも反映する。

『社会学年報』という学術誌の特質をふまえてモースの書評文あるいは講義抄録文の内容を再検討する作業とは、同時にまた、第一次大戦まで『年報』グループの核にいたデュルケムと、その継承者モースとの、個人的な意志疎通の次元までふくめた、思想の交渉過程と連続性を再検討する作業に通ずる。

前回研究会および本研究会で共同研究員各自が試訳してきた書評文、講義抄録文の特質を総括する目的で、その後、第一次『社会学年報』全巻のオリジナル・テクストを研究会席上で各自がそのつど必要に応じ精査しながら、出席者のあいだで活発な共同討議が試みられた。　（真島一郎）

２．「第一期、宗教関連論考の学史的背景」

関は前回研究会までに、モース第一期（1899～1914 年）の主要業績に関する一覧を作成・提示したうえ、邦訳文献のあるものについては、既存の訳書（とりわけ供犠論）におけるモース訳出上の問題点を、複数の主題にまたがり検討・指摘していた。

本研究会で関は、高等研究院宗教学セクションの 1904 年年次報告書に発表されたモースの論文「オーストラリア社会における呪力の起源」や、William James 著『宗教経験の諸相』をめぐるモースの書評文を主たる考察対象とし、これにフィリピン・シキホール島住民を対象とした関自身による民俗誌的ないしは知識人類学的調査の研究成果などをふまえながら、モース宗教関連論考の学史的背景について、斬新な論点呈示を試みた。

とりわけ「オーストラリア社会における呪力の起源」から関が抽出するモース宗教民族学上の主要論点には、①物質化した呪力、②個別にしか（再）生産されぬ社会現象の定型性、③伝統と個人の力学の三点がある。

これらはいずれも、モースが呪力の起源を考察する際に課題として自らへと差し向けた問い、すなわち呪力をめぐる人間の信念はどこまでが本気で、どこまでがフィクションであるかという問いに対峙するための論点であった。

さらに関は、モースによる宗教論が「祈り」と「供犠」の二大テーマにいずれ収斂する事実を宗教学的見地から明快に解きあかしたうえで、ならばモースという研究者にとり、なぜ祈りと供犠が中核的な主題の位置を占めるに到ったのかという、モース宗教論上、きわめて根源的な問いの可能性を指摘した。

なお、関が分担するモース第一期主要業績のうち、『エスキモー社会の季節的変異に関する試論』の部分訳が、本研究会席上、共同研究員の泉により提示された。　（真島一郎）

３．「モースのサンスクリット研究における特質」

高島は、前回研究会において約束したモース書評（analyse）2 本、A. ヒッレブラント著『儀礼文献－ヴェーダの供犠と呪術』（1896）と S. レヴィ著『ブラーフマナ文献における供犠の理論』（1899）の翻訳を示して、予備的研究としていくつかの論点を指摘した。第一に、細部にわたる点ではあるが注意しなければならないこととして、誤植の問題である。タイプライタが発明されて間もない時代で、モースの原稿は手書きであり、しかも悪筆であった（死後稿校訂者の言）。今回、意味が正反対となってしまう誤植を 1 箇所発見し、2 箇所の怪しい箇所に気がついたので、インドの事例のようにモース本人以外に校正できず、『年報』に多量の執筆をしている場合には本人の眼を逃れる場合があったと考えられる。

モースが、インドの宗教文献を儀礼の記述と理論的反省において極めて高い価値を持つもの（特に印欧諸族の儀礼理解に関して）としてその活用を図るとともに、逆に世界の他の宗教の事例からインド宗教の理解も深めることができると考えていたことは明瞭に見て取れる。そこにある批判的精神とでも言えるものが、ドイツ流のインド・アーリア起源への還元的な立場とは一線を画して仏教思想史への展開などを見据えようとしている様子がほのかに見て取れる。

ヴェーダの供犠においては神々よりも「祭式」が重要である、ということをレヴィ等から学んだ上で、「これは私のものではない」というインドの供犠における用語法に特に注目して供犠の本質を見いだそうとするのがモースの供犠理解の核心であり、放棄すること

によって逆説的に放棄する者の主体性が立ち現れてくるというあり方を出発点として「贈与論」や人格論の考察ににつながっていく、というような見通しをとりあえずの仮説として立てられるのではないかと高島は提起した。（高島淳）

４．「二つの暴力論：モースとソレル」

真島による本報告は、①前回研究会でその分担が決まった西アフリカ民族誌関連文献のモース書評文試訳、② 真島が担当するモース第二期の主要業績のうち、任意のテクストの試訳、を各々の参照テクストに据える、事実上の二部構成で進行した。

前半の①について真島が指摘したのは、民族誌を対象とした書評文から垣間見える、モース（あるいはフランス社会学派）独自の語彙運用をめぐる問題点である。それはおおむね、以下の三つの問いのかたちにまとめられる。

アフリカ「未開社会」民族誌の解題を執筆する際にモースが用いた「民事訴訟」「刑事訴訟」「行政官団」「契約」「所有」などの語彙が一見じつに奇妙な異文化翻訳の所産と映るならば、それは近代共和政体の処方箋を民族誌の内に探ろうとしたモースの意図とどのように関わるのか。

「集合表象」や「集合体」などの術語に登場する collectif や collectivité といった語彙系統は、当時のモースが距離をおいた集産主義 collectivisme の政治規範といかなる関係をもつのか。

日本語ではいずれも「力」の訳語となる violence / force / pouvoir / puissance 等の語彙系統は、宗教観念における「力」の含意を経由し、集合行為の合理性／非合理性の当否をめぐる同時代の思潮といかなる関係をもつのか。

また後半の②について、真島は『社会主義生活』誌上にモースが発表した一連の暴力論の試訳を出席者に提示したうえで、これとソレルの『暴力論』第 11 版とを直接関連させる考察を試みた。政治的にはジョレス派に属していたモースのソレル解釈には、おそらくは意図された、やや粗暴な側面がみられる。他方でそこからは、今後の研究課題として次の三点への展望が拓けてくる。第一に、暴力をめぐるモース=ソレル間の対立の構図を考えるうえでは、ジュール・ゲードの政治思想をひとつの補助線として参照する作業が不可欠である。第二に、ファシズム批判に比した彼のボリシェヴィズム批判には、ロシア・ソヴェト権力に対する評価の揺れ、ないしは両義的な態度決定がうかがえる。この点とも関連して第三に、ソレルとモースの対立の淵源を現実のフランス政治史と繋げるうえでは、マルクスによるフランス三部作への参照作業等を介した、二月革命への史的遡行の試みが必須のものとなるだろう。（真島一郎）

５．「モース《祈り》論の学史的背景」

“La prière”はモースの学位論文でありながら他の著作に比して注目度がきわめて低く、モースの〈祈り〉論をめぐる先行研究はほとんどといってよいほど存在しない。本報告で小杉は、モースの〈祈り〉論を研究する前提として、以下の数点を検討した。すなわち、書誌情報（出版の経緯、刊本および既訳間の相違点）、モースの業績全体における位置づけ（高等研究院年次報告の講義題目をもとに）、書評・解説一覧、英訳および所収の解説２本、宗教学・人類学の祈り研究からの言及の有無、学史的背景

についてである。学史的背景については特に Cornelius Tiele、Auguste Sabatier、Joseph Segond らの研究とのかかわりに着目した。

これらの作業に立脚して、（**a**）モースの業績全体において〈祈り〉論はどのように位置づけうるか。特に、供儀論、呪術論との関連において。（**b**）モースの学史的背景を洗い出すことで、モース〈祈り〉論の生成過程はどこまで追跡可能であるのか、の２点を探ることを研究の方向性として提示した。

これを受けて、共同討議では（「呪術の一般理論の素描」の中でモース自身が表明しているように）〈祈り〉や〈呪術〉といった学術用語を持たない主題に対して、その概念を日常用語からいかに鍛えて行ったかをモースのテクストにおいて把握することが第一であることが指摘された。その鍛錬をモースは“La prière”においてもおこなっており、それを精査し、その中からモースがいかに祈りを主題とし固着したのかを浮き彫りにしていくことが課題として確認された。（小杉麻李亜）